

神の御心を正しく知るには

ヨハネ福音書12:12-19

【新改訳 2017】

- 12:12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞いて、
 12:13 なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」
 12:14 イエスはろばの子を見つけて、それに乗られた。次のように書かれているとおりである。
 12:15 「恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」
 12:16 これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。
 12:17 さて、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたときにイエスと一緒にいた群衆は、そのことを証しし続けていた。
 12:18 群衆がイエスを出迎えたのは、イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからであった。
 12:19 それで、パリサイ人たちは互いに言った。「見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」

【祈りながら考えよう】

- (1) ゼカリヤ9章9節で預言された「イスラエルの王」は政治的メシアですか、それとも霊的メシアですか。
- (2) なぜ主イエスは「馬」ではなく「ろばの子」に乗って入城されたのですか。
- (3) イエス・キリストの生涯の中で、この段落の行動が非常に特異なもの「ユダヤ人全体の注目を集めるもの」であるのはなぜですか。

【解 説】

(1) エルサレム入城

その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞いて、なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」(12-13節)

ユダヤ人歴史家ヨセフォスによれば、過越の祭りには、海外にいたユダヤ人もエルサレムに巡礼に来て、270万人にも及んだと記されている。

その中の大勢の人々が、手に「なつめ椰子」(φοίνιξ/フォニック)の枝を持って、エルサレムに入って来られる主イエスを出迎えた。手になつめ椰子の枝を持っていたのは、その昔、ユダヤがシリアの属国であった時、シリアのアンティオコス四世がエルサレム神殿を略奪し、ゼウスを始めとする数々の偶像を据え、ユダヤ人にその偶像を拜むように強要し、安息日や割礼、捧げ物等ユダヤ教の律法を一切守ることを禁じ、従わない者は死刑にした。神殿の器は王の遊興の為に奪われ、神殿に使われていた金は剥ぎ取られ、永遠の火といわれていた聖なる神殿の光は消されてしまった。

そして、更にシリア王は自らを現人神と呼び、都に火を放ち、城壁を破壊し、8万人のユダヤ人を虐殺し、4万人を捕虜、4万人を奴隷とした(BC175年) ことに対して、ユダヤの祭司の家系・ハスモン家の一族が立ち上がり、3年間の戦いの末に勝利し、神殿を奪い返し、宮きよめをした時、なつめ椰子の枝をかざして宮きよめをした古事になっている。

【参考:聖書協会・共同訳 マカバイ記13:51 第七十一年の第二の月の二十三日、ユダヤの人々は賛美のうちにしゅろの枝をかざし、竖琴、シンバル、十二絃を鳴らし、賛歌と歌を歌いながら要塞に入った。イスラエルから大敵が根絶されたからである。】

彼らがなつめ椰子の枝を手を持って、主イエスを出迎えたということは、彼らが、ハスモン家の祭司たちのように、武力を持ってローマ帝国から独立を勝ち取る政治的救い主として、主イエスを歓呼して迎えたということの意味していたと考えられる。

そのような理由で次のように歓呼して叫んだ。

「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に」(13節)

「ホサナ」は「私たちを救ってください」という意味であるが、喜びや賛美を表すことばとしても使われていた。

彼らは、主イエスを「イスラエル民族独立運動の王」として期待した。彼らはハレルヤ詩篇(詩篇113-118篇)のクライマックスである詩篇118篇5-26節のことばをもって叫び続けた。



(2) 預言の成就

イエスはろばの子を見つけて、それに乗られた。次のように書かれているとおりである。

「恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」(14-15節)

ユダヤ人の期待とは裏腹に、主イエスは、馬ではなく、ろばの子に乗って入城された。それは、旧約の預言が成就するためであった。約500年前に預言者ゼカリヤを通して記されたゼカリヤ書9章9節の預言が成就した。

「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」(ゼカリヤ9:9)

救い主は、政治的救い主として軍馬に乗った将軍として来られるのではなく、ごく一般の乗り物であるろばに乗って来られる。しかもおとなのろばではなく、ろばの子である。それは戦争する王ではなく、平和の王を意味する。よって、この預言から分かることは、当時のユダヤ人たちが期待していた政治的メシアではなく、霊的メシアであることが分かる。



(3) 初め弟子たちには分からなかった

これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。(16節)

彼らは理解できなかった。それは、当時の一般のユダヤ人たちだけでなく、主の弟子たちもそうであった。彼らにとってそのことが分かったのは、主が十字架で死なれ、復活、昇天し、天の栄光の座に着かれてからであった。

今日でも多くのユダヤ人は、旧約聖書に記されているメシア預言が、主イエス・キリストにおいて成就したことを認めようとしなない。それは、聖書が次のように教えている通りである。

「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」(Iコリント2:14)

ですから、どんなに知的に優れていても、霊的には盲目であるということが分かる。これは他人事ではなく、私たち自身、霊的なことに対して、理解できるかどうか吟味してみる必要がある。

霊的真理は、日ごとに主から新しく教えられなければならない。私たちは元々、霊的に盲目な者であったから、神の御心については分からないことだらけである。毎日御言葉から教えられ続ける必要がある。自分の常識やこの世の標準などは、全く当てにならない。御言葉だけが真理を教えている。御霊の助けによることなしに、御言葉の真理を正しく理解することはできない。毎朝、聖書と祈りを通して神の御心を知り、それに従い続けてゆきたいものである。

(4) 群衆の動機

さて、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたときにイエスと一緒にいた群衆は、そのことを証しし続けていた。群衆がイエスを出迎えたのは、イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからであった。(17-18節)

イエスがエルサレムに入城するのを見ていた群衆の中に、イエスが死者の中からラザロをよみがえらせたのを見た人々がいた。この人々は、ろばの子に乗っているのがラザロをよみがえらせた方である、と周囲に語った。この著しいしるしのうわさが広まると、イエスに会おうと大勢の人々が繰り出した。あいにく、彼らの動機は真の信仰というよりは好奇心であった。

(5) パリサイ人たちの当惑

それで、パリサイ人たちは互いに言った。「見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」(19節)

群衆の数は膨れ上がり、救い主に対する関心が高まるにつれ、パリサイ人は気が気でなくなった。何を言おうが、何をなそうが、効果は全くなかった。取り乱した彼らは、全世界がこぞってイエスのあとについて行ってしまった、と思わず誇張した表現で叫んだ。彼らは、群衆の興味が一過性のものであること、また、本当にイエスを神の子として礼拝したいと思っている者の数はごく少数であることに気づいていなかった。

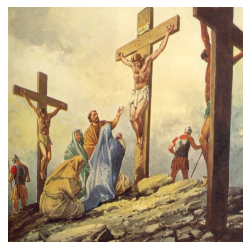
(6) 「ユダヤ人全体の注目を集めるもの」であるのはなぜか。

この個所は、新約聖書において主イエスについて記されているいかなることとも異なっている。これまでは、主はできるだけ人目につかないように身を隠し、荒野に逃れ、主イエスを目立つ存在とし、王にしようとする人々を避けてきた。主は「彼は言い争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない。」方であった(マタイ12:19)。

ところが、ここでは主は多くの群衆に迎えられ、公然とエルサレムに入城され、その結果パリサイ人をして、「世こぞってあの人の後について行ってしまった」と言わせるほどであるのを見ることが出来る。この明白な相違をどう説明することができるだろうか。

イエスが世の罪のために死ぬべき時がいつに來たのである。真の過越の子羊がほふられ、真の贖いの血が流され、預

言されていたとおりにメシアが「**絶たれ**」(ダニエル9:26)、真の大祭司がまことの至聖所に入る道をすべてのキリスト者のために開く時が来たのである。



主イエスの贖いの死は「**片隅で起こった出来事**」(使徒26:26)とされるべきではなかった。

主は一年の中で、イスラエルの全部族が過越の祭りを祝うためにエルサレムに集まって来るその時に、死なれたのである。主は人々の注目を集めてエルサレムに入城され、全イスラエルの目をご自身に集中させた、その週のうちに死なれたのである。

受難週の出来事

(1) 金曜日ーベタニアに着く

ベタニアは、エルサレムから3キロ離れた、オリーブ山の東斜面にある村。この村で、マリアはイエスの脚に高価な香油を注いだ。イエスはこの行為を埋葬の準備だと見なした。

(2) 土曜日ー休息の日

詳細は記されていないが、おそらくベタニアに住んでいた友人であるマリア、マルタ、ラザロとイエスは余暇を過ごしただろう。

(3) 日曜日ーエルサレムへ入城

ろばに乗って、イエスはエルサレムに入城した。これはゼカリヤの預言を成就した(ゼリヤ9:9)。群衆はなつめ椰子の木の枝を振りながら、「ホサナ」と叫んで、イエスを王として歓迎した(マタイ21:1-11、マルコ11:1-11、ルカ19:28-44、ヨハネ12:12-16)。復活祭の前の日曜日に当たる。この日は「しゅろの日曜日」として知られている。

(4) 月曜日ー宮きよめ

神殿の外側の庭は異邦人が祈りを捧げることができる唯一の場所だったが、商人や両替商でいっぱいだった。イエスは憤りを覚え、彼らを追い出し、その台をひっくり返した(マタイ21:12-17、マルコ11:12-19、ルカ19:45-46)。

(5) (6) 火曜日と水曜日ー最後の教え

聴く耳のあるすべての人々にイエスが教える最後の機会となった。特に世の終わりに、イエスが再び来ることを教えた(マタイ21:23-25:46、マルコ13:1-37、ルカ21:5-38)。

(7) 木曜日ー最後の晩餐とゲッセマネ

イエスは弟子たちの足を洗い、一緒に過越の食事をした。ユダがイエスを裏切るために、こっそり抜け出したのは、この時だった。一方、残りの弟子たちはゲッセマネに出かけた。そこでイエスは、ペテロがイエスを否定すると予告した(マタイ26:31-35、マルコ14:27-32、ルカ22:31-34)。ゲッセマネでイエスは祈り、イエスを逮捕するために遣わされた人々を待った(マタイ26:36-56、マルコ14:32-52、ルカ22:39-53、ヨハネ18:1-14)。

(8) 金曜日ー①イエスの逮捕(マタイ26:47-56、マルコ14:43-52、ルカ22:47-53、ヨハネ18:1-11)

②前大祭司アンナスによる予備尋問(ヨハネ18:12-13、19-24)

③大祭司カヤパの前に立たされる、ペテロがイエスを否定する(ルカ22:54-65)、

④サンヘドリンの前の正式な裁判(マタイ26:57-27:1、マルコ14:53-15:1、ルカ22:66-71)

⑤ピラトの前での裁判(マタイ27:21-14、マルコ15:1-5、ルカ23:1-5、ヨハネ18:28-40)

⑥ヘロデ・アンテパスの前での裁判(ルカ23:6-12)

⑦ピラトの前に戻って、死刑を要求される(マタイ27:15-26、マルコ15:6-15、ルカ23:13-25、ヨハネ18:33-19:16)

⑧ローマ兵に嘲られ、鞭で打たれる(マタイ27:27-31、マルコ15:16-20)

⑨十字架を負わされるが耐え切れず、クレネ人シモンが代わりに運ぶことになる(マタイ27:32、マルコ15:21、ルカ23:26)

⑩午前9時、イエスはゴルゴタで二人の犯罪者の間ではりつけにされる(マタイ27:33-56、マルコ15:22-41、ルカ23:32-49、ヨハネ19:17-37)

⑪午後3時、イエスの体はおろされ、近くの墓に葬られる(マタイ27:57-66、マルコ15:42-47、ルカ23:50-56、ヨハネ19:31-42)

(9) 安息日

(10) 日曜日ーイエスが復活する!